

いわきの地域新聞と新聞人

いわきの地域新聞は、明治 40 年（1907）に発行された「いはき」新聞を最初とし、以後、大正・昭和時代に、様々の旬刊紙・日刊紙が生まれました。その数は 130 を超えています。紙面には、いわきの当時の政治・経済・文化・世相が、実に生き生きと記されています。後期常設展示では、それらの新聞と新聞人を紹介します。

□ 明治時代の新聞 地域新聞の誕生

明治時代に文明開化の伝達手段として新聞は誕生しました。福島では、明治 6 年（1873）に若松・福島・磐前（いわさき）県から官製新聞が発刊されますが、同 9 年、3 県が合併して福島県が誕生することにより、これらは数号で終刊になりました。（磐前県は 3 号。）

民間新聞は、自由民権運動の中から、「福島日日新聞」「福島自由新聞」などの政党新聞が登場し、現在の県内紙の「福島民報」は、明治 25 年（1892）に、同じく「福島民友新聞」は、同 28 年発行の「福島実業新聞」を前身として、同 32 年に改題しました。

この中で、明治 40 年（1907）、いわき最初の民間新聞「いはき」は、吉田礼次郎により発行されました。また、翌 41 年には「国華新聞」が斉藤亀五郎により発行されています。

明治後半から大正前半のいわきの新聞購読は、「福島民報」、「福島民友新聞」よりも、隣県茨城の「いはらき新聞」（明治 24 年創刊・現在「茨城新聞」）と東京の「報知・日日・やまと・時事」に大部分を占められていました。明治 42 年に平町・吉田礼次郎の吉田新聞店が「いはらき新聞」の特約販売所となり、翌 43 年には同新聞に「磐城版」の紙面が設けられています。これは、福島・いわきの距離の問題と茨城・いわきに共通する産業＝炭鉱業と新聞取次店の勢力からだと思われます。

■ 「いはき」 □ 吉田礼次郎

創刊は、明治 40 年（1907）5 月 25 日。発行人は吉田礼次郎、編集人は高木朝重、印刷人は高城寛雄。紙面はタブロイド版、紙価が 1 部 5 銭、広告料は 5 号活字 19 字詰 1 行が 15 銭。発行所が「いはき社」（平町字白銀町）でした。

「いはき」の特約販売店は、いわきの他に、水戸・久慈町・川尻・高萩・磯原・関本など茨城県、富岡・新町・浪江・小高・原町・中村など浜通りであり、当時の吉田新聞店（創業は明治 30 年・常磐線開通の年）の勢力圏をうかがい知ることができます。

6 号までは月 1 回、25 日に発刊されました。創刊号は 20 頁、以後 16～8 頁。同年 10 月 25 日の 7 号から 4 頁となり 5・15・25 日の月 3 回になります。翌 41 年 4 月 11 日の 23 号まで現存していますが、終刊の時期は不明です。

■ 吉田礼次郎 明治 3 年（1870）に平町白銀の旧磐城平藩士・吉田忠知の二男に生まれ、荒物商を経て明治中頃から新聞販売業を始め、東京に平陽社を置き、茨城・いわき

にも展開し、平町会議員・石城郡会議員を務めました。クリスチャンで、特記すべき活動は、平町の「遊郭」設置に対しての人道的反対運動でした。

■ 「国華新聞」 □ 齊藤亀五郎

創刊は、明治41年(1908)9月15日。発行・編集人は齊藤亀五郎。紙面はB5版、本文16頁。定価が1部5銭、広告料は24字詰1行が15銭。発行所が苦学舎(平町仲間町)、印刷は水戸でした。

現存するのは2号のみで、明治41年9月30日発行。毎月15日と30日の発行。

同新聞では、小学生・女学校を対象に「和歌・俳句・文章・一口話」を懸賞募集していました。特等(金1円)・1等(金50銭)・2等(金25銭)・3等(本紙1ヶ月分)。2号に東京師範付属・水戸の作品の他に磐城青年学校の生徒の文「笹舟先生を送るの詩」があることから、同新聞の終刊は3号前後と思われます。

■ 齊藤亀五郎 相馬の人で、当時平で磐城青年学校の教師をしていたようです。また、笹舟の名で、昭和15年(1940)に『磐城三藩戊辰戦争余聞』(発行所・福島県相馬中村東海岸郷土史蹟研究会)を出しています。

□ 大正時代の新聞 旬刊紙から日刊紙に

大正時代前半、大正2年(1913)10月に「東洋実業新聞」、同4年5月に「磐城時報」、同7年12月に「磐陽新聞」(社長・佐藤庄太郎)、などの旬刊紙が発刊されました。その中の「磐城時報」が、大正8年(1919)3月にいわき地域紙「最初の日刊紙」に切り替わります。

大正時代後半、日刊紙が次々と登場しました。大正10年(1921)3月に「磐城新聞」の前身「磐城興信日報」が目黒芳次郎により、同12年2月に「磐城日日新聞」が横山頭により、同年11月に「常磐毎日新聞」が川崎文治により、創刊されました。

日刊紙の普及は、地域の政治・経済・文化の情報を伝えるメディア＝「新聞の時代」の幕開けでした。

吉田新聞店の独占だった新聞販売の業界には、大正5年に新聞販売・通信社の磐城通信社の小野務平が進出してきました。

■ 「磐城時報」 □ 土屋寛 □ 佐藤作平

創刊は、大正4年(1915)5月15日。1日と15日の月2回の発行、4頁の旬刊紙で始まりました。同8年3月から、土屋と佐藤の共同経営となり、資本金2万円、社長が佐藤作平、主筆・編集長が土屋寛、営業部長が小野務平、広告・販売部長が上平二郎の体制になりました。3月1日から日刊(夕刊)になりますが、2年後の同10年(1921)9月21日、創業者の土屋寛が34歳で亡くなり、一時期、編集長に鈴木昌雄がなりますが、同14年から岡田弘成に代わりました。

昭和2年(1927)1月の状態は、発行・編集・印刷人は岡田弘成。紙面はタブロイド版2頁。紙価が1部2銭、1ヶ月30銭。広告料は14字詰1行50銭。発行所が磐城時報社、印刷所は加納活版所でした。「不偏・報道迅速・不党・中立・記事正確・厳正」

を新聞の方針としていました。

現存するのは、昭和2年1月1日（通巻3901号）から同15年（1940）10月31日夕刊（通巻7925号）までです。

■**土屋寛** 旧磐城平藩士・土屋保久の三男。保久は廃藩置県後の福島警察署長や小名浜外14ヵ町村の初代戸長を務めた人物。寛は34歳で亡くなりますが、友人により平・大宝寺に追悼碑が建てられました。号は短軀であった「ちび」をもじって「知美」。

■**佐藤作平** 平町に加納五郎の子で、小名浜の佐藤家に養子に入り、金融会社を始めますが、大正8年(1919)、文化事業を志し「磐城時報」の経営に加わり社長になりました。

■**岡田弘成** 相馬中学校から第二高等学校に進むが中退。大正14年(1925)から「磐城時報」の主筆。昭和15年(1930)の同紙廃刊後は「磐城毎日新聞」の発行・編集・印刷人を務めました。

■「磐城日日新聞」 □横山顕

創刊は、大正12年（1923）2月16日。社長は横山顕。

大正12年8月の状態は、発行・編集・印刷人は横山顕。紙面はタブロイド版2頁。紙価が1部2銭、1ヶ月50銭。広告料は5号13字詰1行50銭。発行所が磐城日日新聞社（平町字田町）、印刷所は一〇活版所でした。新聞終刊の時期は翌13年の11月前後と思われます。

現存するのは、大正12年8月20日（通巻103号）から大正13年5月5日（通巻336号）までの内7日分です。

■**横山顕** 明治20年（1887）、宮城県古川に生まれ、「読売」「都」新聞の政治部を経て、一時期実業界に転じますが、大正12年（1923）、「磐城日日新聞」を創刊。翌13年11月には「河北新報」平支局店長になりました。

■「磐城興信日報」「磐城新聞」 □目黒芳次郎 □蓮沼龍輔

「磐城新聞」の前身「磐城興信日報」の創刊は、大正10年（1921）3月16日。日刊（夕刊）2頁で始まりました。資本金4万円。同14年までは目黒芳次郎が社長、主筆は蓮沼光之助でした。同15年に社長が蓮沼龍輔に代わりますが、主筆は引き続いて蓮沼光之助でした。昭和6年（1931）に柏木哲が主筆になり、同年の社主は鈴木辰三郎でした。昭和10～11年は蓮沼が主筆・編集長を兼ねますが、同12年に柏木が編集長で復帰しました。題字が「磐城新聞」になる時期は不明です。

「磐城興信日報」大正10年8月の状態は、発行・編集・印刷人は目黒芳次郎。紙面はタブロイド版4頁。紙価が1枚2銭、1ヶ月50銭。広告料は15字詰1行30銭。発行所が東北興信所（平町字田町）、印刷所は磐陽社でした。平駅汽車発着表の掲載があり、平・上野の時間は急行で5時間、各駅停車だと7時間を超えていました。

「磐城新聞」昭和2年（1927）5月の状態は、発行・編集・印刷人が蓮沼龍輔。紙面はブランケット版4頁。紙価が1枚2銭、1ヶ月50銭。広告料は1行50銭。発行所は磐城新聞社（平町字田町）でした。

現存するのは、「磐城興信日報」が大正10年8月8日（通巻114号）の1紙のみ、「磐城新聞」は昭和2年（1927）4月28日夕刊（通巻1926号）から同15年（1940）11

月 13 日夕刊（通巻 5971 号）までです。

■**目黒芳次郎** 鉱業界で長く活躍しましたが、文化事業に志し「磐城興信日報」を創刊し、社長になりました。

■**蓮沼龍輔** 栃木県の生まれ、「磐城新聞」の経営者。戦後、市議員から県議員。県会議長を 3 期務めました。

■**柏木 哲** 湯本の生まれ。一時、税務署に職を得ますが、新聞界に転じ、中央紙の平通信部記者を振り出し、新天地を求めて北海道に渡り樺太中央新聞、樺太日々新聞の社会部長を務めました。大正 10 年（1921）、「磐城興信日報」の創刊に際し編集長に着任。大正 13 年、「いはらき新聞」の平支局長となりますが、「磐城新聞」に戻りました。号は柏葉。

■ 「常磐毎日新聞」 □川崎文治

創刊は、大正 12 年（1923）11 月 1 日。川崎文治が、「いはらき新聞」平支局を退社し、日刊紙「常磐毎日新聞」を出発させました。川崎は 1 社 1 人主義を唱え社長・編集長・主事・営業部長・広告勧誘員・販売拡張員・発送係・小使・給仕の仕事を一人で行なおうとしました。昭和 7 年（1932）には営業部長に坂本忠治を迎えました。販売数は同 14 年（1939）、3500 部でした。

創刊時の状態は、紙面は小型 4 頁。紙価が 1 部 2 銭、1 ヶ月 30 銭。広告料は 5 号 13 字詰 1 行 50 銭。発行所が常磐毎日新聞社（平町字長橋）でした。創刊号では文藝の投稿の募集があり、2 号からは「常磐文藝」の欄がつくられています。

現存するのは、創刊号から昭和 15 年（1940）10 月 31 日夕刊（通巻 4925 号）までです。

■**川崎文治** 明治 28 年（1895）、平町長橋に川崎金作の長男に生まれ、上京して中央大学で学び巖谷小波に師事しました。「お伽噺」を研究、少年少女の雑誌に寄稿。日比谷図書館児童室講演部嘱託を経て、平町にて児童雑誌「磐城の学友」を主宰。大正 6 年（1917）から「いはらき新聞」で 7 年間記者を務めました。この時期、在平の詩人山村暮鳥と親交がありました。号は小鳥。同 12 年、「常磐毎日新聞」を創刊しました。

■ 「いわき新報」 磐城通信社 □小野務平

創刊は、大正 11 年（1922）7 月 19 日。5 日・15 日・25 日の月 3 回発行の旬刊紙で、持主は小野務平。

大正 12 年 10 月の状態は、発行・編集・印刷人が小野務平。紙面はタブロイド版 2 頁。紙価が 1 部 2 銭、1 ヶ月 50 銭。広告料は 5 号 12 字詰 1 行 40 銭。発行所が磐城通信社（平町搔槌小路）、印刷所は平活版所でした。

現存するのは、大正 12 年 9 月 28 日（通巻 248 号）から同年 10 月 27 日（通巻 287 号）までの内 7 日分だけです。

■**小野務平** 明治 17 年（1884）、石城郡玉川村字南富岡の西丸彌太郎の 4 男に生まれ、小名浜小野家に養子に入りました。大正 5 年（1916）、平町にて磐城通信社を創設。新聞販売業と通信員として記事を配信しました。小名浜町会議員、小名浜商事株式会社専務取締役、泉製氷株式会社、磐城通信社の社長と政治・経済界で活躍しました。

□ 昭和初期の新聞 新聞文化の浸透

大正時代末から昭和初めは、大衆文化が成熟し、そのメディアとして、新聞が急成長しました。これまで新聞の発行は平だけでしたが、他の地域でもつくられるようになりました。

四倉では大正 15 年 (1926) 8 月に「四倉新報」が小林庫二により、小名浜では昭和 3 年 (1928) 6 月に「磐城水産新報」が伊藤隆次により、湯本では昭和 4 年 10 月に「湯本中央新聞」が小松彌八により、創刊されました。

そのような中、日刊紙が生まれました。昭和 5 年 3 月に「新しいわき」が半谷政喜により創刊され、4 月には旬刊紙「磐城水産新報」が伊藤隆次により日刊紙「常磐新聞」に切り替えられました。

■ 「四倉新報」 □小林庫二

創刊は、大正 15 年 (1926) 8 月 16 日。編集・発行人は小林庫二。月 2 回 (1 日・15 日) 発行の旬刊紙。紙面はタブロイド版 4 頁。紙価が 1 部 10 銭、1 ヶ月 20 銭、年 2 円。発行所が四倉新報社 (平町田町) でした。4 号からは 2 頁になりました。

現存するのは、創刊号から昭和 5 年 (1930) 1 月 25 日 (通巻 23 号) までです。

■ 「湯本中央新聞」 □小松彌八

創刊は、昭和 4 年 (1929) 10 月 1 日。編集・印刷・発行人は小松彌八。月 3 回 (不定期) の発行の旬刊紙。紙面はタブロイド版 4 頁。紙価が 1 部 5 銭、1 ヶ月 10 銭。広告料は 5 号 12 字詰 1 行 30 銭。発行所が湯本中央新聞社 (湯本町三函) でした。

現存するのは、創刊号から同 5 年 1 月 26 日 (通巻 4 号) までです。

■ 「新しいわき」 □半谷政喜

創刊は、昭和 5 年 (1930) 3 月 25 日。発行・編集・印刷人は半谷政喜。夕刊。紙面はタブロイド版 2 頁、紙価が 1 部 2 銭、1 ヶ月 25 銭。広告料は 1 行 40 銭。発行所が会川活版所 (平町四町目) でした。

現存するのは、創刊号から同 15 年 (1940) 10 月 31 日夕刊 (通巻 3054 号) までです。

■半谷政喜 明治 18 年 (1885)、双葉郡真野村に生まれ、北海道・函館の親戚の養子に、同市のラッセル英語学校を卒業。茨城採炭・秋山炭鉱・役場を経て、福島日々新聞の創刊に際し入社し平支局長。大正 11 年 (1922) には、国民新聞社平支局長に、そして、昭和 5 年 (1930) に「新しいわき」を創刊しました。

■ 「磐城水産新報」「常磐新聞」 □伊藤隆次

「常磐新聞」の前身の「磐城水産新報」の創刊は、昭和 3 年 (1928) 6 月 10 日。月 2 回 (1 日・15 日) 発行の旬刊紙。主幹は伊藤隆次。紙面はタブロイド版 2 頁。紙価が 1 枚 10 銭、1 ヶ年 3 円。発行所は常磐新聞社 (小名浜町)。水産業に特化した新聞で、40 号まで発刊しました。

昭和 5 年 4 月 12 日から「常磐新聞」に改題、号数は引き継がれ 41 号から日刊紙に

なりました。昭和5年4月の状態は、発行・編集・印刷人は伊藤隆次。紙面はタブロイド版2頁。紙価が1部3銭、1ヶ月3円60銭、広告料は12字詰1行50銭。発行所が常磐新聞社（小名浜古港）でした。小名浜測候所の天気予報が掲載されていました。

「磐城水産新報」で現存するのは、創刊号から昭和4年10月30日（通巻35号）までです。

「常磐新聞」で現存するのは、昭和5年4月12日（創刊号・通巻41号）から昭和13年(1938)12月24日夕刊（通巻1241号）までです。

□ 戦時中の新聞 言論の統制

昭和12年（1937）から始まった日中戦争以降の戦時体制の下で、新聞は「国論統一と同一職種の集約化」の国策により統廃合されていきました。

同15年12月、1県1紙の方針により、「福島民報」と「福島民友新聞」は、「福島民報」に統合されます。

いわきでは、昭和14年に旬刊紙が整理され、翌15年10月31日には日刊紙5紙「磐城時報・磐城新聞・常磐毎日新聞・新しいわき・常磐新聞」が廃刊の共同声明、夕刊紙「磐城毎日新聞」1紙に統合されました。

9ヶ月後の同16年8月、同紙は「福島民報」に合併され廃刊になりますが、いわきは県の東南端にあり新聞輸送が容易でないことから、「福島民報・磐城夕刊」として継続されます。しかし、戦局の悪化により同19年3月には同紙も廃刊となり、いわき地域の新聞は皆無になりました。

■ 「磐城毎日新聞」 □岡田弘成

創刊は、昭和15年(1940)11月13日夕刊。日刊紙5紙が「国策的見地に基づき消費節約の一端担い、国論統一の新時代に善処する」ため、廃刊となり、夕刊紙1紙に統合されたのです。号数は「磐城新聞」のを引き継ぎ5972号から始まりました。

創刊時の状態は、発行・編集・印刷人は岡田弘成。紙面はブランケット版2頁。紙価は1部3銭、1ヶ月60銭。広告料は1行60銭。発行所は磐城毎日新聞社(平市田町)でした。

現存するのは、創刊号から昭和16年8月30日夕刊（通巻6205号）までです。

■ 「福島民報磐城夕刊」 □高木稲水 □野沢武蔵

創刊は、昭和16年(1941)9月1日夕刊。1県1紙の政策により、「磐城毎日新聞」は、「福島民報」に合併され廃刊になりますが、いわきは県の東南端にあり新聞輸送が容易でないことから、「福島民報・磐城夕刊」が発行されます。

創刊時の状態は、発行・編集・印刷人は高木稲水。紙面はブランケット版2頁。紙価が1部3銭、1ヶ月60銭。広告料は1行60銭。発行所は福島民報平支社(平市田町)でした。

2年半後の同19年3月、戦局の緊迫に伴い6日付で同紙は休刊になります。この時の発行・編集・印刷人は野沢武蔵（同17年12月から支社長）でした。

現存するのは、創刊号から昭和19年3月4日（通巻737号）までです。

□ 戦後の新聞 民主主義の声

敗戦の昭和 20 年 (1945) 12 月、いわきでは新興紙の創刊や戦前廃刊された新聞の復刊が相次ぎました。その中でも旬刊紙が早く、12 月 1 日に「昭和新報」の改題新聞「勤労タイムズ」が木村安次により、同月 20 日には「磐城春秋」が高木稲水により創刊されます。それは、占領軍総司令部の民主化政策の一環として、既存の新聞には一定の制限をし、逆に新興紙には新聞用紙の割り当てを優先的に行ったことからでした。

新聞用紙の配給が困難な中、昭和 21 年 2 月に「いわき民報」が野沢武蔵らにより、同 24 年 12 月、「磐城日報」が後藤幸夫により創刊されます。

戦後日本復興の転換点となった朝鮮戦争が勃発した昭和 25 年には、5 月に「磐城毎日」が遠藤孝倫により、8 月に「磐城日日」が長瀬芳郎により創刊されます。

翌 26 年、新聞用紙の配給と新聞購読料の統制が撤廃され自由競争の時代に入りました。同 29 年 5 月に「三和 (さんわ) 新報」が遠藤節により創刊されました。このように戦後、日刊紙が創刊されましたが、現在も継続しているのは「いわき民報」だけです。

■ 「いわき民報」 □野沢武蔵

創刊は、旬刊で昭和 21 年(1946)2 月 5 日。「戦前にあった磐城毎日新聞の題字を継承しては」の意見もありましたが、新しい題字「いわき民報」第 1 号で出発しました。

創刊時、紙面はタブロイド版 4 頁、購読料は月決め 1 円 20 銭、1 部売り 40 銭。社長は野沢武蔵、編集長は千輝克己(元朝日新聞平通信局長)、編集担当は伊藤敬一郎と高野吉男、営業は田名網美枝でした。

待望の日刊紙には同年 5 月 1 日から、タブロイド版 2 頁、購読料は月決め 3 円、1 部売り 15 銭。同月 15 日から夕刊になりました。翌 22 年 7 月 6 日には社屋を建て、10 月 15 日には自社印刷が始まりました。平成 23 年(2011)年 9 月 26 日現在、通巻 19904 号。

■野沢武蔵 青森市の生まれ。大正 15 年 (1926) に時事新報社に入社、昭和 7 年 (1932) に同社平通信部に着任しますが、同 11 年同紙が廃刊になり退社。直ちに福島民報平支局に入社。戦時下の「磐城毎日新聞」「福島民報磐城夕刊」の経営に関わり、福島民報支社長になりました。戦後は「いわき民報」の創刊に尽力。平市議・県議員も務めました。

■ 「磐城日報」 □後藤幸夫

創刊は、昭和 24 年(1949)12 月 1 日。編集・発行人は後藤幸夫、印刷人は丸山得平。紙面は B5 変形 2 頁、購読料は 1 部売 1 円、1 ヶ月 30 円。発行所は磐城日报社 (平市白銀町) でした。

現存するのは、創刊号から昭和 25 年 12 月 22 日 (通巻 296 号) までです。

■ 「磐城日日」 □長瀬芳郎 □高瀬霞

創刊は、昭和 25 年(1950)8 月 14 日。社長・印刷・発行人は長瀬芳郎、編集人は高瀬霞。紙面はタブロイド版 2 頁。購読料が 1 部 2 円、1 ヶ月 50 円。発行所は磐城日日新

聞社（小名浜寺廻）でした。

現存するのは、創刊号から昭和30年12月15日（通巻1473号）までです。

■ 「磐城毎日」	□大和田與兵衛	□遠藤孝論
----------	---------	-------

創刊は、昭和25年(1950)5月23日。社長・大和田與兵衛、編集・印刷・発行人は遠藤孝論。紙面はタブロイド版2頁。購読料が1部売2円、1ヶ月50円。発行所は磐城毎日新聞社（平市南町）でした。

現存するのは、創刊号から昭和26年5月23日（通巻299号）までです、

■ 「三和新報」	□遠藤節
----------	------

創刊は、昭和29年(1954)5月6日。同25年9月2日創刊の旬刊紙「じょうばん」の継続。紙面はタブロイド版2頁。購読料が1ヶ月50円。発行所は三和新報社（平市六町目）でした。

現存するのは、創刊号から昭和33年12月29日（通巻1919号）までです。

■参考図書

- 『磐城紳士録』 磐洋新聞社 大正11年
- 『磐城信用録』 東北実業新聞社 昭和4年
- 『磐城百年史』 荒川禎三 昭和43年
- 「いわき新聞物語」(1)～(5) いわき民報 昭和45年10月掲載
- 『いわき市史』第6巻「文化」 昭和52年
- 『日本新聞年鑑』復刻版 第1冊～第33冊（大正10年～昭和16年の動向）日本図書センター 昭和60年—昭和61年
- 『新聞総覧』復刻版 第1巻～第19巻（明治38年～昭和18年の動向）大空社 平成3年—平成7年
- 『福島民報百年史』 福島民報社 平成4年
- 『福島民友新聞百年史』 福島民友新聞社 平成7年
- 『諸橋元三郎と文庫の歩み 三猿文庫展図録』 いわき市立草野心平記念文学館 平成13年

いわき総合図書館 地域資料展示コーナー 平成23年度後期常設展示

いわきの地域新聞と新聞人

編集・発行 いわき市立いわき総合図書館
発行日 平成23年10月1日
会 期 平成23年10月1日—平成24年3月25日